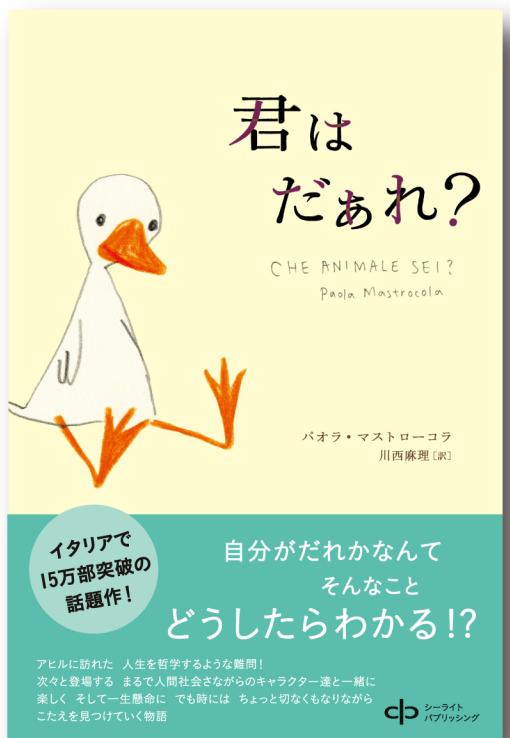


「自分は誰なのか？」素朴でもあり、難題もあるこの問いかけを、主人公のアヒルの女の子の目を通して見つめていく。ユーモラスな語り口とストーリーで、ほほ笑みと、そして思慮をプレゼントしてくれる、子供から大人までが楽しめる一冊。

イタリアで15万部突破の話題作

自分が だれかなんて… そんなこと どうしたら わかる！？

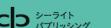


ISBN978-4-903439-05-1 C0097 ¥1600E

四六判・288頁 2008.08.11発行予定

定価1,680円(本体1,600円)

アヒルに訪れた人生を哲学するような難問！
次々と登場するまるで人間社会ながらのキャラクター達と一緒に
楽しく、そして一生懸命にでも脳にはちょっと切なくもなりながら
こたえを見つけていく物語



シーライト
パブリッシング

この世に生まれてくるとき、自分が何者かなんて知っている者は1人もいない。でも、もしそれをずっと誰も教えてくれなかったら？ そしたらもちろん、人生はかなりややこしくなる。たとえば、このアヒルの女の子。彼女は自分が何者かを知らなかった。なぜなら、クリスマスの夜、生まれたばかりだったこの子は、ジャックのトラックの荷台から転がり落ちて、突然ひとりぼっちになってしまったから。そして、たまたまそこにあった、ふさふさした毛に覆われたねズミのスリッパをお母さんだと思い込み、ぽかぽかと暖かく気持ちのよいスリッパの中で、まだ自分が生まれていない夢を見ながら、すやすやと眠った。彼女はこのねズミのスリッパのお母さんを持てたことがうれしかった。こうして、すべてがこのまま変わらずに時が過ぎていくはずだった、もし、世界をもっと知りたいという願望が彼女に芽生えなければ。そして、みんなが彼女にこう尋ねなければ…『君はだあれ？』。彼女が「スリッパよ」と答えるのを聞いて、ジョージ・カストールはあっけにとられた。「ビーバーよ」と答えるのを聞いて、ポルトロン・ストレルは大きな黒いマントをひるがえし、彼女の周りをばたばたと羽ばたいた。

そして、たくさんの出会いと冒険を経た後、彼女はトルマー先生と出会い、ついに自分の真の正体を知ることになる。じゃあ物語はここで終わり？ とんでもない。自分が何者であるのかを知ることは素晴らしいこと、なにより私たちに安心感を与えてくれる。でもだからといって、それだけで人が心から安らかに暮らせるわけじゃない。それにはさらに、たくさんの想像力と、何人かの素敵なものたちが必要だ。ひょっとすると、君と恋に落ちる孤独な狼も必要、かも…

4歳の時、「猫は自分が猫だって知ってるのかなあ？」と尋ねた、私の息子へ

パオラ・マストローコラ

